臨床工学技士を支援する団体活動について

肥田 泰幸
日本臨床工学技士連盟 理事長／公益社団法人日本臨床工学技士会 常任理事

臨床工学技士（以下CE）が誕生して四半世紀の月日が経過した。“生命維持管理装置の操作および保守点検を業とする”という基本業務を主に、臨床の現場や医療安全に多大な貢献を果たしてきたと実感する。一方、その過程において業務拡大を目指してきた、先人の方々による地道な努力の積み重ねがあったことを忘れてはならない。現在のCEの資格取得者は他の医療職種に比べて歴史が浅いこともあり、比較的若い世代で構成されている。一つ目のテーマとして、多方面にわたって活躍の場が設けられることになった歴史的経過を振り返り、改めて業務の意欲とCEとしての誇りを再確認していただくことをお話ししたい。

昨今は極めて便利な世の中となり、多くの人の協力によって社会が成り立っていることを実感し辛くなったが、CEのように人を対象とした医療職であり、かつ特殊で高い専門性をもった職業こそ多くの人の協力体制を実感しなければならない。その必要性をお伝えするのが二つ目のテーマである。技士会や連盟はCEを守り育てる職能団体だが、CE一人一人の協力体制が整わなければ成り立たない。会費に対する直接的な還元を実感する場面は決して多くないが、団体活動の継続もしくは強化を行わない限り、その職業の資質向上や待遇改善を期待することはできない。医療機関の収入にあたる診療報酬や医療行為として認められるCEの業務範囲など、すべて職能団体の活動が起点となっている。例えば、今年10月に施行される予定の「看護師の特定行為度」では、CEの業務と重複する内容が数多く含まれているが、職能団体としての活動がなければ議論にすらならない。一方、「医工連携」は政府の推し進める成長戦略として注目されているが、「臨床工学」として注目されないのは職能団体の力不足に他ならない。

この度、小生に与えられた機会により傾聴された方が、CEの未来に直接関わる技士会や連盟の活動内容と必要性を理解し、ご自身が積極的に参加と活動を行って充実感のある日々を送ることに繋がればこの上ない喜びである。